腹をくくって、いつもの食卓を演出

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
フードコーディネーター兼データ管理　　藤田　あずさ

ロケが始まる約1週間前の事です。撮影に使う料理を用意して欲しいと話がありました。スタッフルームの白板にある「スケジュール表」を見ながら、早く料理を決めないと撮影が始まってしまう！大変だ！との思いでメニュー会議がはじまりました。

朝食ならばこのおかずがいいんじゃないか、佐賀といえばこれを使いたいなどフードコーディネーターの仲間と話し合いを重ねました。作った料理は、まず試食会で監督や製作スタッフの了承を得てから、3日間の食事風景の撮影になりました。

私と同じく料理担当の川原麻子さんが担当した初日は、朝食と昼食の2シーンで、ご飯や味噌汁、卵焼き、我が家の塩にんにく唐揚げ、ひじきの煮物におにぎりなどを大量に抱え、撮影場所の徳田邸へと向かいました。

映画のプロの集まりの撮影現場に素人2人が紛れ込んだ形になり戸惑いましたが、スタッフから「2人のいつもの食卓を作ったらいいんだよ。食器の並べ方も地方によって違いがあるかもしれないし、それは私達じゃわからないんだから。自分たちの自然なやり方でやってね」と声を掛けられ、腹をくくることができました。

現場の張りつめた空気を感じながらモニターを覗かせていただき、カットがかかるとせわしなく次の準備をする私達に「美味しい」と声をかけてくれる役者さん、ありがとうございました。映画をぐっと近くに感じることができた素晴らしい一日でした。

支援する会に参加して

映画「ら・かんぱねら」に携わって

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
支援チーム　　稲冨　紀子

「同級生のことが映画になる」と聞いた時は、「すごいねぇ～」くらいで他人事の想いでした。ある日の事です。ちょっとした用事で支援する会の事務所に立ち寄った時、狭い事務所の中では、楽しそうにみんな笑顔で活動されていました。

そして、同級生で事務局長の川崎賢朗さんから「一緒にやろう」と声を掛けられ、これがキッカケで少しずつ活動に関わるようになりました。しかし、仕事の都合もあり撮影のボランティア活動は、参加したかったけど、何も手伝えないままクランクアップを迎え、みなさんにはほんとに申し訳ない思いでいっぱいでした。

その後、支援する会の会議に参加してみると、支援金のお願いや今後の宣伝広報などを真剣に話され、ひとりでも多くの方に知って貰いたいという熱い思いが伝わり、支援の輪が拡大している事を強く感じました。本当に凄いことだと実感しました。

佐賀市文化会館での完成披露試写会の日、キャストのみなさんが舞台挨拶の中で、支援する会の努力と熱意を褒め称える話をされたときは感動でした。また5分間のエンドロールは、まるで映画の一場面のような感覚でした。

佐賀人として、この映画に携わるチャンスを頂いたことに心から感謝しています。

支援する会に参加して

映画の体験は、人生の糧になった

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
支援チーム　　池田　莉奈

私は、友達の紹介で映画「ら・かんぱねら」を支援する会に入って撮影に関わる機会を頂きました。その当時、私は高校3年生でした。

初めて事務所に入った時、知らない人がほとんどで事務所では、支援する会の人や映画スタッフと打ち解けるまで時間が掛かり、緊張していた事もありますが同時に楽しみが混じった気持ちだったのを覚えています。ロケでの撮影の機会には、あまり参加する機会はありませんでしたが、想像以上にスタッフの人が多いのに驚きました。こんなに支えているスタッフがいるから、1つの映画が成り立つ事を知りました。

撮影の中でエキストラとして参加した時です。最初から一人だけカメラに写っていてとても緊張し、NGシーンを出してしまい迷惑を掛けました。その時、南果歩さんから「大丈夫」と声を掛けて貰い安心しました。カメラの前での演技がどれだけ大変か分かりました。

監督は、スタッフの意見をなんでも取り入れていて、 何故なのか疑問に思っている部分もありました。監督と一度話をした時に、「その分野の人の意見を取り入れると、よりよい作品ができると思う」 と言われました。そんな考えを持っている人もいるのかと学びました。

監督は他の事に対してはこだわりが強いところがあるので、ロケ中に要望などがたくさんあり振り回された事もありました。

撮影前からスタッフをしていましたのでロケ地での撮影禁止の張り紙やオーディションの申込者のまとめ、それにポスター配りなど支援する会のスタッフと一緒に活動する事が出来ました。こんな小さなお手伝いでも映画に何らかの形で還元できると感じました。振り返ると、撮影時は映画に関しての知識は全くなく不安になった事もありました。 経験したことは初めての事ばかりで、苦戦の連続でしたが新しい世界を見る事ができ、良い人生の糧になったと思いました。

支援する会に参加して

台本を読み返し、自分なりの海苔監修

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

海苔監修　　佐々木　成人

映画撮影現場は、今まで経験したことのない場所でした。俳優さんたちの表情や仕草、その合間に見せる稽古での真剣さは凄い迫力でした。華々しく表舞台で脚光を浴びる俳優さんの陰には、カメラ照明、録音などその道のエキスパートが一つの作品のために協力し合い、時にはぶつかり合いスタッフ一丸で最高の映画を創るために日々努力される姿が伝わってくる最高の現場でした。

私は、海苔監修の大役に指名され荷が重かったのですが海苔の事、作業の大変さ、何より佐賀海苔の品質と味の良さを多くの人に知って貰おうと海苔監修を受けました。有明海の現場では、「潮の流れ」「風の向き」は勿論の事、俳優さんたちが本物の海苔師に見えるか自分なりに考えて、何度も台本を読み返し指導しました。

こんな事が現場でありました。有明海の特徴でもある6メートルに及ぶ干満の差での出来事です。リハーサルを繰り返すと潮位が変動して、本番では見える風景が変わりました。こんな時こそ、我々海苔師の出番です。海苔網の高さを調整し、船の位置を移動し万全の体制で本番を迎えました。潮の満ち引きは、映画だろうが何だろうが待ちません「宝の海有明海は偉大」でした。

主役の伊原剛志さんが映画の中で「潮は待たんぞ!!」というセリフを言いますがこのフレーズは、海苔師の人との雑談の中から伊原さんが気に入りセリフに取り入れた秘話でもあります。まだまだ、たくさんのエピソードと出会いました。

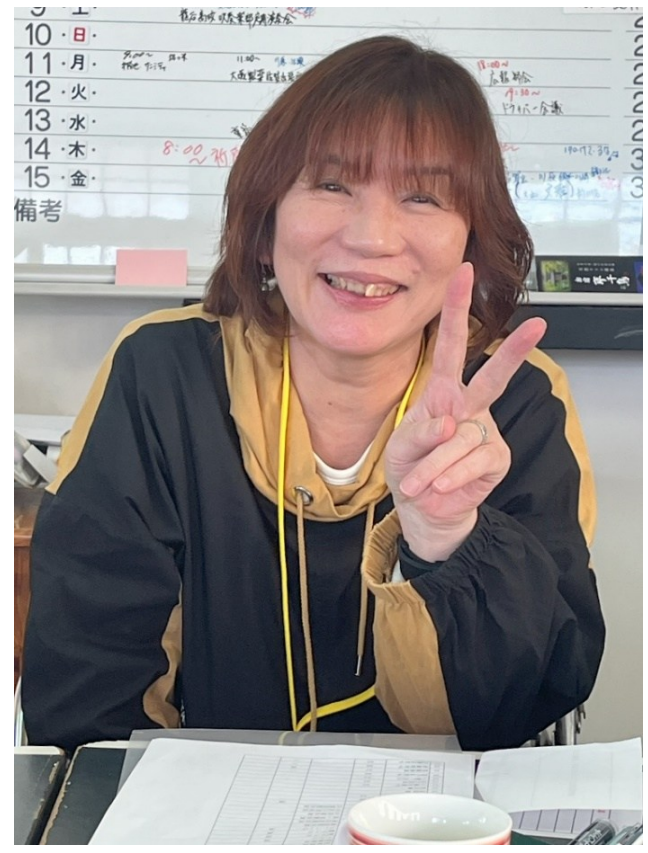
私が映画創りに参加し言えることは、本当に楽しかった一言に尽きます。大変だったことや、思いや考えの違いもありましたが仲間との出会いもあり、本当に楽しかった。最後に映画「ら・かんぱねら」を支援する会の仲間に出会えたことに感謝申し上げます。

支援する会に参加して

美味しそうに焼けたが・・・実は！？

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

フードコーディネーター　　馬場　亜希子



映画スタッフが食事を取るために設営されたテントで干物を焼く練習をしました。キャンプ用のガスコンロを使って1回目の試作を焼きました。結果は大失敗！魚の形はボロボロで悲惨な焼き上がりになり大笑いでした。

撮影に使われた干物は、見た目重視ということで、焼き上がりはとても美味しそうに焼けました。しかし、実際は中まで火が通っていない生焼けです。でも映像では、綺麗に映し出されてました！

塩海苔は、海苔師の家庭で常備品だと聞いてます。伊原剛志さんも「これは美味い」と言って、撮影の合間でも食べて下さいました。

海苔小屋を改修したピアノ部屋で食べるシーンのお弁当は、コンビを組んだ川原麻子さんと相談し「爆弾おにぎり弁当」に決め試作を行い監督へ確認。確認後のお弁当に製作スタッフが群がり、あっという間になくなってしまいました。スタッフが美味しそうに食べている姿を見てとても嬉しかったです。皆さん是非、映画の中の食べ物にも気を配って観て頂ければ幸いです。

映画製作は、段取り、テスト、本番と繰り返しながら撮影されていく事を目の前で見る貴重な体験が出来ました。その中でも、伊原剛志さんと南果歩さんの心のこもった演技には魅了されました。

最後に、私がフードコーディネーターを楽しくできたのは、いつも笑顔で過ごせた仲間たちのおかげです。ありがとうございました。

支援する会に参加して

美味しい、ありがとうに嬉しくて頑張った

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

炊き出し班　　北村　由美

職場の人たちからの勧めや高校球児の寮母をしていたので手伝い程度ならと気軽に参加したものの、いつしか「おもてなし隊」炊き出し班のリーダーに任命され驚くばかりで不安もありました。

ロケ現場での炊き出しは、差し入れや協賛の品などを考慮し、メンバーで事前に献立を決め不足の品物は買い足しを行って、当日は作るばかりに準備をしていました。

しかし、出来上がるまでの時間の制限もあって、ゆっくりはできない状態でした。でも皆んながテキパキと動いてくれて、どんどん料理が出来上がっていきました。

また、私が失敗したり味付けを決めかねていると仲間の皆んなが寄り添って来てフォローしてくれました。

そんな中でも一番の楽しみは、空いている時間を利用したおしゃべりタイムでした。皆んながとても明るくて、色んな話が聞けて時間の経つのを忘れてしまう程でした。

そろそろ食事の時間ではと配膳に取り掛かろうと思っても、撮影が押したりで温かい物が冷めないかと心配したり、逆に煮詰まり過ぎないかと火の調整に手こずってました。そんな苦労を知ってか鈴木監督や俳優さん、それに製作スタッフの方々が「美味しい」「ありがとう」等と声を掛けて頂き嬉しい気持ちでいっぱいになりました。主演の伊原剛志さんは、どんな天気の日でも毎回来て頂き、私たちの作った料理に必ず笑顔で声を掛けてくださった素敵な方でした。

最後になりましたが炊き出しスタッフの皆様にはかなり助けて頂き、本当に感謝しかありません。ありがとうございました。

支援する会で懐かしい出会い

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
副デスク　　千住　友二

令和5年秋、不思議な物語のスタートになりました。例年になく、たくさんの花苗を買い求めたのです。オーガニック野菜を育てたり、寄せ植えをつくったりすることが趣味の一つで、土いじりが大好きです。

10月、友人から映画「ら・かんぱねら」を支援する会の発会式に誘われました。内容は、海苔漁師が、フランツ・リストの「ラ・カンパネラ」に挑戦し、見事演奏できるようになるものでした。徳永義昭さんとは2回目の出会いで、川口プロデューサー、鈴木一美監督との出会いにもなりました。

流れが大きく変化したのは、今年2月からです。スタッフルームへお手伝いに通うようになりました。日に日に会話が増えていき、これまで知らなかった人達と仲良く、楽しく、頼まれるままの作業、仕事をこなしていきました。

何気ない会話の中からいろんな発見、出会いが見つかりました。そのひとつは、モデルとなった徳永義昭さんの長男の奥様です。30年前受け持った卒業生の妹さんでした。小3の時の顔を今でもよく覚えています。また、映画に出演している佐賀市出身女優川崎瑠奈さん、六年生の時の担任は我が家によく泊めていた元同僚というサプライズもありました。

お手伝いを進めていく中で、私の役目は文書を作成する役が固まっていきました。人のお役に立てる、何と素晴らしいことでしょう。自分にできることで周りの人が喜んでくれる。ふと気づいたことは、この映画「ら・かんぱねら」がもつ、人と人とを結びつけるエネルギーのようなものなんだということです。

不思議な物語とは、昨日まで知らなかった人と人とが結びついていく「縁」のようなものということを感じました。そうです。私の育てた寄せ植えが映画「ら・かんぱねら」にエキストラ出演していました。これまたビックリ！

支援する会に参加して

襟元の缶バッチに声を掛けられた

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

商工部会長　　山西　淑朗

ロケが終わって上京した時の事です。羽田空港のターミナルビルの前で、大宮行きのリムジンバスを待っていた時です。私の襟元をじっと見つめてる女性が「すみません。少しお話し良いですか」と声を掛けてきました。

「リストのラ・カンパネラ、お好きなんですか？私もピアノを弾きますので・・・」との事でした。確かに私は、襟元に「ら・かんぱねら」の映画の缶バッチを付けていました。

この缶バッチは、佐賀でのロケ中に亡くなった支援する会スタッフの原征治さんが作ったものでした。

女性は広島の方でした。私は、支援する会の名刺を渡し、映画の事を話しました。

「佐賀の海苔漁師がリストのラ・カンパネラを独学で7年の歳月を掛けマスターされ、夢を叶えた物語で家族の愛が盛り込まれたドラマなんですよ」と話すと女性は、「凄いですねぇ。頑張ってください。私も必ず広島で観ますから」と励ましてくれました。

私の出身は小豆島で、佐賀東高のOBでもなく海苔の関係者でもないですが、ご縁があって支援する会のスタッフになりました。映画を通してスタッフの皆さんの映画に対する気持ちの強さを感じ心を動かされました。

ありがとうございました。

支援する会に参加して

元気を貰った、お客様の対応

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
支援チーム　　中溝　由美子

映画「ら・かんぱねら」が2025年1月31日にイオンシネマ佐賀大和で先行上映開始となった。その舞台挨拶で主人公の妻役南果歩さんが、「支援する会の皆さんの卒業式でもあり、作品のスタートの日」と言われたが、なんと、私にとってはこの日が映画に関わるスタートの日となったのです。

映画撮影中は何の手伝いも出来ず、オーディションや佐賀市文化会館での試写会等数える程度だった。

定年退職し時間も出来たので、支援する会の一員として出来る事をしようと、上映中の3月中旬からは映画館の券売機でお客さまがチケットを購入する際のお手伝いを始めた。連日多くのお客さまがいらして、満席で当日の入場が出来ずお断りする日もあり心苦しかった。

中には、「高速使ってきたのに・・」と呆然とする方がいらっしゃって、何とか翌日の予約をし、再度足を運んで頂き有難いと心から思った。また、発券機の操作が難しく、お手伝いが必要なお客さまからは、「よかったぁ～ひとりでは買いきらんやったよ！ありがとう！」と笑顔で感謝された時は、お役に立ててよかったと逆に元気をもらった。

1月31日の公開から連続で上映期間が延長され観客動員数も記録づくめの勢いだが、私も微力ながら貢献出来たのではないかと自負している。

映画を通して貴重な経験が出来、支援する会に声をかけて下さった川崎賢朗さん、鐘ヶ江留美子さんには感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

想い出の一枚

令和6年11月17日完成披露試写会

イオンシネマでの特別試写会

完成披露試写会スタッフ

伊原さんとKBCテレビでPR

BEERパーティーの記念写真

伊原さん舞台挨拶前に事務所へ

現場を癒したミユキティー

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
車両部（ドライバー）　　竹下　美由紀

私にとって、映画「ら・かんぱねら」との出逢いは、本当に意味あるものになりました。

28年間勤めた会社を退職する事を決めたタイミングで、知人から一緒にボランティアをしようと誘われたのがキッカケでした。もう二度と映画製作に携わるチャンスはないと思い、二つ返事で承諾したのが始まりでした。

ボランティアは、俳優さんや製作スタッフの為の炊き出しの他、製作スタッフをロケ現場まで送迎するドライバーを主にさせて頂きました。

撮影現場では、映画製作の過程など十分に楽しませて貰い、ボランティアというより一緒に映画スタッフになった感情が大きかったです。

その中で、みんなが疲れているだろうと思い、コーヒーやお茶だけでなく、甘い飲み物(ミルクティー）で疲れを取ってあげたいとの気持ちから、毎日、現場に持って行く様にしてました。

その度に、スタッフのみんなから「待っていたよ～！ミユキティー！」と、私の名前とミルクティーを掛け合わせた「ミユキティー」が定着し喜んでくれました。そのことが、私自身の楽しみにもなっていました。

また、孫と一緒にエキストラにも参加できて、今までにない経験もでき、本当に意味のある映画となりました。

そして、素晴らしいボランティアの仲間との出逢いにも感謝！

支援する会に参加して

俳優の近くでエキストラ！大興奮の私

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

支援チーム　　緒方　珠美

私は、佐賀市の浪漫座であったピアノの発表会のシーンにエキストラ出演が叶いました。

人生初の映画の製作に関わった事は、私自身最高に興奮した1日でした。広い浪漫座には、エキストラ100人以上がぎっしり席を詰め、正面のステージには、ピアノが準備されていました。その中、助監督たちが映像に主役が上手く撮影できるように席替えを繰り返していました。

私は、同じ会場に主役の伊原剛志さんや南果歩さん、それに大空眞弓さんがいるだけで感情が高まっていました。

決まった席は、真正面から見たら、なんとなんと伊原さんと大空さんの間だったんです。それだけで私は、緊張で胸が震えていました。目の前での演技には、大興奮で溢れ出るオーラが半端でなく、大俳優だと思いました。

南果歩さんは、とてもチャーミングで素敵な声で登場された瞬間、会場のエキストラの皆さんの顔が綻び拍手が沸きました。

これまでは、テレビの画面越し、映画ではスクリーン越しでしか見ることが出来なかった俳優が、私の目の前で見る事ができ、感動・感激・大興奮の１日でした。

一生の宝物です。大切にしていきます。

支援する会に参加して

セットづくりの細やかさに驚き

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
支援チーム　　池田　史子

「池田さ～ん、あさって映画の話し合いのあっけん来んばよぉ！」と次男の友人の父、久米善彦さんから電話がありました。以前聞いた話ではあったものの“マジか！”困ったことになったぞ！面白半分で「手伝うよ」と言っただけなのにと思いつつも話し合いに参加してみました。支援する会の実行委員会に2回、3回と参加するうちに、映画製作の進み具合を楽しみにするようになりました。

私にとって2～4月は仕事上一番忙しい時ですが、合間をぬって撮影準備の手伝いをしました。まずは、川副町川崎邸の海苔小屋2階の大掃除からです。床が抜けそうになりながらの掃き掃除や片付けなど、ほこりが舞う中での掃除は鼻の奥まで真っ黒け。(笑)

その後、牡蠣殻に色を塗る作業です。美術担当の黒瀧きみえさんの指示で色を塗り始めたものの黒瀧さんが首を傾げ始めたので、みんなは一端手を止めました。海苔の種付け用の牡蠣殻と色合いを比べながら、色の調合を何度も何度も繰り返され、納得された黒瀧さんからの“GO！サイン”で再開したのでした。

ロケも順調に進んでいるころ、スタッフと共に大道具倉庫から、テーブルや椅子等を佐賀市のレトロ館に運び入れた時の事です。レトロ館は、大空眞弓さんの自宅になり、映画では重要なシーンのひとつです。だからでしょうか、装飾担当のスタッフがテーブルや椅子の位置をミリ単位で動かされたり、光の入り具合を確認される等、プロのこだわりを肌で実感し、映画づくりの世界にどっぷりとのめり込んだ私でした。

支援する会に参加して

応接セットづくりは最大の自慢

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
広報部（情報収集担当）　　島ノ江　素子

映画「ら・かんぱねら」を支援する会に参加することが出来て、幸せで誇りに思います。

支援する会で感じたことは、皆さんの映画に対する熱意と仲間を思う心です。とても素敵で愛に溢れた人たちでした。仲間ひとりひとりが自主的に何か出来ることがないかとコツコツ動き、その積み重ねが大きな力となって話題を作り上げて行ったのでした。

また、映画の中で、元ピアニスト石田秋子役の大空眞弓さんが「夢があれば、生きていける」と語りかけるシーンは感動でした。それは、支援する会のみんなが目標に向かって進む姿で映画そのものでした。

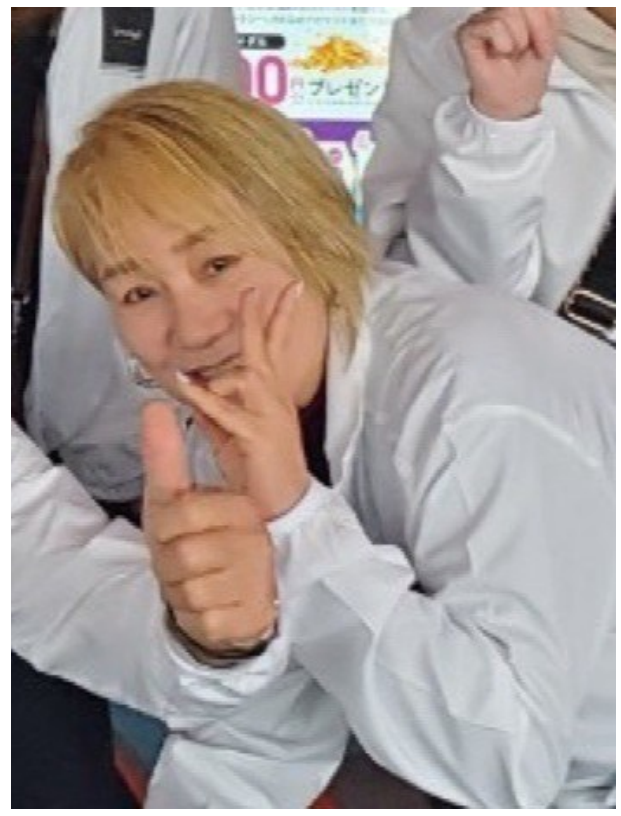
個人的には、テレビドラマなどでよく拝見していた大空眞弓さんが出演した、佐賀市のレトロ館で部屋の応接セットづくりを手伝った事は最大の自慢です！

そして、素晴らしいキャスト、スタッフ、支援する会の仲間が誇りです。これからもこの映画が多くの人に届きますように祈念いたします。

支援する会に参加して

本当の仲間と言われ、最高でした

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
車両部（ドライバー）　　北村　佳子



この映画のスタッフに入ったキッカケは、映画「ら・かんぱねら」を支援する会の久米善彦さんから「炊き出しとか暇な時だけでいいから手伝って」と軽い気持ちで誘われたのが始まりです。でも夢のような1ヶ月でした。

初めての体験ですが映画スタッフとの関わりを持たせて頂いた事に感謝致します。中でも、川副町小々森で主役の自宅になる田中邸の掃除の手伝いに行って美術担当の黒瀧きみえさんとは仲良しになりました。それからです。黒瀧さんとは、富士町のロケ地を下見に行ったり、同じ川副町の川崎邸の海苔小屋をピアノ部屋に変えるための作業で、壁の色塗りや美術助手の鈴木貴士さんを交えて防音シートのカットなど手伝いました。

「凄く簡単な作り物」が撮影されたモニターに映し出されると、私が色塗りしたとは思えないほど、本物のように見えて「これぞプロの技だ」と感心させられました。

作業の合間の事です。とっても嬉しかった事がありました。それは、甘い物が苦手な私に、貴士さんが「仲間だけが食べられるお菓子を食べて」と差し出され「よしこさんは本当の仲間だよ」と言われたのは最高でした。

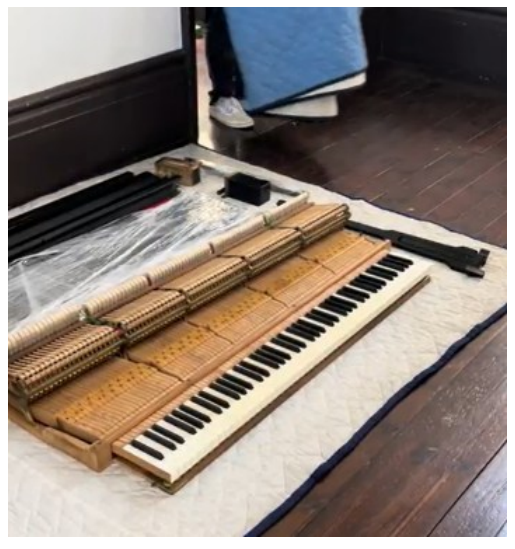
他にも、映画関係者をロケ現場まで移動するためのドライバーも担当しましたが楽しい事ばかりでした。ロケ現場で邪魔にならず過ごせる場所を見つけました。それは、録音担当の清水雄一郎さんのところで、全体の進行も分かるしモニターで本番の映像も見られ何時間いても飽きませんでした。特に面白かったのは、清水さんのボヤキで、それがもとても楽しかったです！（笑）

支援する会に参加して

広報部員ちえりんは見た！

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
広報部　　進　智恵

ロケ期間中、行けるときは現場を取材にお邪魔していた私。こんなに撮影の裏側を見て回ったのは私くらいかもしれません。その中でも一押しの現場をお伝えします！



§1　グランドピアノ空中大作戦！！

この現場は、新聞にも掲載され、かなり話題になりました。スタインウェイのグランドピアノを佐賀市のバルーンミュージアムからこのさがレトロ館へ移設するという難易度高い現場でした。実はこの後が大変だったらしく、ピアノを運び出すシーンの撮影をしてからピアノを梱包してトラックへ積み込み、既に夜中だったので運送会社の倉庫へいったん預けて後日時生のピアノ部屋へ運ぶという、撮影部、ピアノ運送会社、調律師さん、すべてのスケジュール調整が神がかりに合わさってのピアノ大移動だったようです。

§2　調律師さん役の方の役者魂が凄い！

この大移動作戦の時、調律している様子を学びに調律師役の女優さんが来られました。実際に調律師の手さばきを見て色々尋ねておられ、その後YouTubeなどで調律の様子を見て学んで撮影に挑まれたそうです。

映画の中では、数分の場面なのですが、私にとってとても印象深いシーンです。

支援する会に参加して

記録写真から見た、素敵な仲間たち

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
広報部（撮影班）　　飯田　豊一

3月14日早朝、映画の祈願祭が川副町の海童神社で行われました。とても寒かったのですが、いよいよ始まるとの士気の高揚からか境内は緊張の中にも和やかなムードに包まれていました。記録写真の撮影はここからが始まりでした。

3月17日は、クランクインで撮影がスタートしました。私はロケ隊に同行し有明海まで行きましたが、ほとんどが海での作業シーンばかりで、とにかく寒かった思い出があります。そんな過酷な撮影が続いている中、支援する会の炊き出しスタッフが準備した温かいスープが癒しになったのか、食事中は、終始和やかな雰囲気になり俳優や撮影スタッフから感謝の声が掛かっていました。その上、炊き出しスタッフとのグループ写真やツーショットなど写真に応じられていました。

その後、4月12日のクランクアップまで佐賀城公園や浪漫座、そして東与賀海岸などでの撮影が続いたのですが、その間に有名な俳優さんや有名な作品に携わってこられたスタッフの方と会話ができ、普通じゃ考えられない時間を過ごす事が出来ました。

俳優さんたちや撮影スタッフの皆さん、そして支援する会のスタッフ皆さんは、これ以上ない素晴らしく素敵な方ばかりです。

皆さんに巡り会えたことやこの映画に携われたことは、一生の宝物として想い出に残っていくと想います。

支援する会に参加して

芸能界への第一歩

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
広報部　　納富　美聡

この映画の存在と出会ったのは、母の弟が亡くなったタイミングでした。法事の後に、学校や将来の夢について親戚の人たちと話をしていた時でした。事務長の川原常宏さんから誘いがあり、支援する会に参加しました。今思えば母の弟が、繋いでくれた素敵な縁だと思っています。

当初、役者は雲の上の存在だと思っていたので関わることはないと思っていました。しかし、伊原剛志さんや緒形敦さんをはじめ、主要キャストの人と話しすることが出来たのは、とても光栄でした。皆さんに頂いたサインは、上京してから頑張る糧になっています。そして、会う度に声を掛けて頂けることに感謝しています。

高校生最後の年に、製作の手伝いや映画に関わったことはありがたく、ここまで撮影現場が「居心地がいいな」と思えることはないと思います。

卒業後の今は、芸能の専門学校で裏方を学んでいますが、この経験を大事に活かし今後の現場づくりの参考にしたいと思っています。素人なのに、照明の担当者に今後の話しを気楽に話せたり、手伝えたことが、とても嬉しかったです。使う機材や職種は違いますが、誰よりも早く現場経験が出来たのは良かったです。また、製作で大学生の人とも出会え、たくさん手伝うことも出来たし、こんな仕事もあるんだと勉強になりました。

私は今後、映画とは交わることのない職に進むかもしれません。でも、私にとって生まれて初めての現場は「ら・かんぱねら」だし、将来の夢への第一歩でもあります。この映画に関われたことで、夢があればどんなに辛くても「その夢に向かって頑張れるんだ」という事、人とのつながりや関わり方を学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

キャストとスタッフの両輪で活躍

映画「ら・かんぱねら」製作スタッフ

キャスト兼エキストラ担当　　川崎　瑠奈

キャストとスタッフを同時並行で参加する作品は初めてでした。

18歳で佐賀を出て約8年、26歳になった私はいま、俳優として地元に帰り、皆さんと一緒に映画製作に関わるなんて想像も出来ませんでした。

ふるさとは温かく出迎えてくれ、何よりも心を通じ合える仲間に出会えた事と合わせて、一緒に同じ温かいご飯を食べて過ごした時間は私の宝物になりました。

撮影も終盤に入り、私の出演するラストカットの時でした。支援する会の皆さんや小さい頃から応援してくれる地元の皆さんが海苔小屋まで足を運んでくれて、「るなちゃんの最後の撮影だから頑張れ！」と言って励まし、映像が映し出されるモニターの前で見守ってくれました。皆さんに何とお礼を言ったら良いか分かりません。

オールアップの時には、主演の伊原剛志さんや製作スタッフの皆さんに囲まれて迎えられたことや花束を頂いたこと、そして控え室に戻る時に支援する会の皆さんが笑い泣きしながら花道アーチをつくって見送ってくれたことは、今でも鮮明にその時の光景が浮かびます。あんなに温かなオールアップの瞬間は、絶対に忘れません。

映画に携わりながら、必死に頑張り抜いた毎日は私の財産となり最高の時間でした。

素敵すぎるキャストやスタッフの皆さんとの出会いを頂いてありがとうございました。

全てに感謝です。

支援する会に参加して

エキストラ同士で話し合った演技

映画「ら・かんぱねら」を支援する会
スタッフルームチーム　　石隈　由紀子

演技経験も無く勢いだけでエキストラオーディションに応募しましたが見事に落選しました。でもオーディションが意外と楽しかったのでセリフはないですが役者の後ろを歩くなどのエキストラの登録をしました。

そして、エキストラでの出演チャンスを待ちながら、最初は初めて映画に出演出来るかもと期待でワクワクしていました。しかし、運良く出演出来たとしてもカット割の都合などで映像に映らない可能性は大いにあると聞き、出るからには映れば良いなという気持ちと不安な気持ちが入り混じりつつの中、佐賀城公園での撮影にエキストラの声が掛かったのです。

当日は凄く綺麗な青空で、天気も佐賀城での撮影を喜んでいるように感じました。私の役は、友人と公園内を歩く事や親子4人で観光するものでした。役の設定とざっくりとした動き、口は動かして欲しいが声を出さないようにとの指示があった以外には自由に演技して良いとのことでした。少しでも自然な演技が出来るようにと、撮影前にはエキストラ同士で自分たちの役の設定を更に細かく決めてセリフも作りました。即興で作ったエキストラの小さな物語は誰にも気付いてもらえませんが私にとっては大切なワンシーンになりました。

佐賀城でのエキストラは撮影の度に人の組み合わせがシャッフルされましたが、組む相手が変わることは珍しいことではなく、相手が変わっていても映画を観ている人にはほとんど気付かれないそうです。普段はあまり注目されないエキストラですが、一度注目して観てもらえるとまた違った一面が見えて面白いと思います。初めてだらけのエキストラでしたが、緊張しつつも全てが最高に楽しかったです！！貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

そして、映画「ら・かんぱねら」は、沢山の素敵な人たちが一生懸命作った映画です。 末永く多くの皆さんに観てほしいと思っています。